

第一版からの翻訳理念を踏襲しつつ

二〇〇三年に出版された『新改訳』第三版は、一九九〇年代からの社会的・教会的要請に応える形で、「ツアラアト」・差別語・不快語等を含む約九百節の改訂を短期間で行いましたが、それは、全面改訂というものからはほど遠いものでした。

しかし、今回の「改訂」は、聖書翻訳団体である新日本聖書刊行会が、自らの意志で「大改訂」を決定し、教会のわざとして、出版社との契約関係の中で行われたものです。そして、四十余りの教派・教団・神学校・諸団体の協力と祈りと支援の中で、『聖書新改訳2017』の刊行に至りました。

今回の翻訳改訂の特徴は、第一に、我が国における、「初めての」本格的な邦訳聖書の「改訂」作業であるということです。かつては『大正訳』が『明治元訳』の「改訂」として翻訳されましたが、新約聖書のみで刊行でした。今回は、『新改訳』第一版からの翻訳理念を踏襲しつつ、初めての「全面改訂」が行われています。現時点では、旧新約聖書約三万三千節の九〇%の部分に、用字用語を含む、何らかの改訂が施されています。

向こう三十年を視野に入れながら、思い切って改訳したところも多々ありますが、『新改訳』の従来の特徴や言いまわしを尊重しているため、「大改訂」であるにもかかわらず、『新改訳』の特徴と雰囲気を持っています。これまで『新改訳』を用いてきた読者にも、さほど違和感を感じることなく、読んでいただけるのではないかと思います。

何を、どのように変えたのか

第二の特徴は、同じ福音主義の立場に立つ、旧約学者と新約学者と日本語の専門家の連携が日常的に行われ、旧約聖書から新約聖書への連続性を、従来以上に注意して訳出することができていることです。第一版の時は、新約聖書が先に刊行されたこともあり、聖書全体を視野に入れた編集作業が徹底されていなかったところがあります。今回は、「改訂」であるゆえに、当初から、日本語表現の検討、旧約と新約の関係、特に「新約聖書における旧約聖書の引用」の問題等が入念に検討されています。原典に忠実であり、しかも、より簡潔な日本語訳を心掛けたことで、『新改訳』を使ってこなかった方々も、このたびの改訂によって新鮮な魅力を感じられることと思います。

(津村俊夫 Ⅱ 翻訳編集委員長)

日本語の変化、聖書学の進展に対応

「慣れ親しんでいる聖書を、どうして改訂しなければならないのですか」という質問を受けることがあります。確かに、暗唱している聖句が変わるとやっかいです。たくさん書き込みをしている聖書を手放すのも残念なことです。しかし、改訂はしなければなりません。

その理由は、第一に、日本語自体が変化していることです。例えば、「言いつける」という言葉から、今日まず思い浮かべるのは、「告げ口」でしょう。しかし、かつては、「命じる」という意味で、使われていました。

改訂が必要な第二の理由は、聖書学の進歩です。聖書の本文自体、長年の研究によって、変わってき

何を、どのように変えたのか

ています。

半世紀前、新約聖書の「底本」は、ネストレ・アラント二四版でしたが、現在は二八版です。例えば、第一テサロニケ2章7節で、かつては「エーピオイ＝優しい」という語が本文にありましたが、現在は「ネーピオイ＝幼い」です。本文の変更によって、聖書の教えそのものに重要な違いが生じるわけではありませんが、変更した箇所は、かなりの数にのびります。

問題は、本文だけではありません。ギリシア語文法、語彙、文化などの研究も積み重ねられ、多くの新しい注解書や研究書が生まれています。一つ例を挙げましょう。第三版では、ヘブル11章11節に、「(サラも)子を宿す力を与えられました」とありますが、この表現は、男性が子をもうけることを意味するものであることが判明したので、「アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました」といった訳に変える必要があります。テインデル聖書注解のヘブル書(一九八三年)では、サラが主語という見方を踏襲していますが、エリנגワースの詳細な注解書(一九九三年)では、アブラハムが主語です。

さらに、改訂が必要な第三の理由は、初版から第三版までで扱いきれなかった問題があることです。例えば、旧約引用や旧新約間の訳語の統一に改善の余地が多くあります。初版は新約から出版し、それに旧約が続きましたので、十分に調整することができなかったのです。具体例は後で記します。

このようなわけで、聖書は変わることのない神のことばでも、翻訳聖書は、何十年おきかで改訂していくべきものなのです。ドイツ語のルター訳は、十六世紀に誕生しましたが、今日でも改訂が続けられています。もともと『新改訳』という名称を採用した背景には、改訂、改訳を積み重ねていくという理

何を、どのように変えたのか

念があったからだと聞いています。

現在、日常で使われている表現に

長い時間をかけて検討を加えてきた中から、少し具体例を挙げたいと思います。

(1) 日本語の変化に伴う訳の変更

すでに述べたように、日本語が変わったために、より分かり易い訳語・訳文に換える必要が生じてきました。

「かわや」と聞いて若い方々は「何のお店？」と思うかもしれませんが、そこで、「かわやに出されてしまう」は「排泄されます」と訳しました。

「戒めを受けた」は「警告を受けた」、「ひもじかった」は「空腹になった」、「人をやり」は「人を遣わして」、「やかましい」は「騒がしい」、「しわざ」は「行い」、「不品行」は「淫らな行い」といった具合に置き換えました。

「徳を高める」は曖昧で、儒教的な色合いの濃い言葉です。これは、建築用語の「オイコドメー」一語を訳したもので、「徳」という名詞が使われているわけではありません。そこで、文脈に応じて「成長させる・人を育てる・霊的な成長を図る」といった訳語をあてることにしました。

最近、世の中では広く「つぶやく」という語が行き交うようになりました。「ツイート・ツイッター」です。それは、小さなコメントを書き込むことで、聖書で「つぶやく」と訳されるとき否定的な意味

何を、どのように変えたのか

合いはありません。そこで「つぶやく」と訳されてきた言葉は、文脈に応じて「小声で文句を言う・不平を言う・こぼす」などと訳しました。

(2) まぎらわしい表現をより明確に

文章の途中で、「〴〵のために」とあると、理由なのか、目的なのか、案外分かりにくいものです。そこで、目的の場合はできるだけ「〴〵するように」といった表現を使って区分しています。

かつて口語訳で「会堂司」と訳されていたものを、新改訳は「会堂管理者」に置き換えました。しかし、この訳語は、どうしても建物の管理人という印象を与えます。会堂における礼拝や教育も含めて、全体を取り切っているリーダーを表すには、「会堂司」がふさわしいでしょう。

「最高議会」もまぎらわしい表現です。ローマ総督が治めるユダヤに、「議会」があるのも妙です。実は、宗教的な問題を裁くことが許されている機関ですから、他の邦訳のように「最高法院」がよいと判断しました。

(3) ひらがなを漢字に

ひらがなが多かった新改訳聖書です。「多いから子どもでも読める」と言われる一方で、「多いから読みにくい、理解しにくい」という意見もよく聞かれました。『新改訳2017』では漢字が増えました。「いっしょ」は「一緒」、「事がら」は「事柄」、「りっぱ」は「立派」、「いやし」は「癒やし」、「やみ・暗やみ」は「闇・暗闇」、「ふえる」は「増える」、「わかる」は「分かる」、「あかし」は（原則として）「証し」といった具合です。

「やさしい」は「易しい・優しい」と漢字表記にすることで、どちらか迷わなくてすみます。ところで、

何を、どのように変えたのか

病気は「直す」が正式だったようですが、今日ではもちろん「治す」です。

しかし、漢字への変換を機械的にするわけではありません。「ひとり」は「一人」としますが、神については「神おひとり」「主はひとり」となります。「みな」は「皆」ですが、「くはみな」といった副詞的用法はひらがなです。「いけにえ・犠牲・自分」は「献げる」、「祈り・感謝」は「ささげる」という区別もしています。

(4) 旧約との調整

これまで旧約では「子羊」、新約では「小羊」でしたが、両者を区別しなければならない理由はありません。そして、意味しているのは「小さな羊」であるより「子どもの羊」ですから、「子羊」で統一しました。

また、「孤児」(新約に二か所)、「みなしご」(旧約に四八か所)という訳語の違いもありました。これはどちらかに統一というわけにはいかず、文脈に応じて、併用しています。さらに、旧約で「シエオール」は「よみ」と訳され、それに対する新約のハデスは「ハデス」のままでしたが、「よみ」に統一しました。

今回は、旧約と新約を同時に出版したので、新約にある旧約引用のすべてに検討を加えることができました。その結果、原文が対応している限り、できるだけ共通の訳語を採用しました。例えば、イザヤ40章3節とマタイ3章3節は、これまで「荒野に呼ばれる者……主の道を整えよ」、「荒野で叫ぶ者……主の道を用意……せよ」と違っていましたが、後者に統一されました。

(5) 簡潔で読み易い訳文

何を、どのように変えたのか

新改訳聖書は「冗長」とか「丁寧すぎる」と言われることがありました。そこで、今回、原文の意図を損なわない限り、簡潔で読み易い訳語を採用するよう努めました。

例えば、不要な代名詞の繰り返しを避けるだけでも読み易くなります。

「なぜなら・それは」からです」は「」からです」とするだけで、意味は通じます。

「答えて・説明して・叫んで言った」は、「答えた・説明した・叫んだ」で十分です。

また、文の結びに丁寧な表現があれば、文の途中にある丁寧な言い方は省くことができます。

(6) 理解し易い訳文

一つの工夫は、内容にふさわしい表現にすることです。例えば、「おまえたちは白く塗った墓のようなものです」は叱責ですから、「……ものだ」で結ぶべきです。

段落替えも理解の助けになります。例えば、使徒7章のステパノの説教は、2節から50節まで、まったく段落替えがありませんでした。これを9節、17節、23節、30節、35節、44節で段落替えし、読み易くしました。底本のネストレ・アラント二八版と、国際聖書協会第五版を参考にして、新約聖書全体の段落を確認しました。

(7) 固有名詞（地名、人名）

固有名詞もすべて再検討した結果、地名や人名で、広く使われているものは、できるだけそれに合わせることにしました。「マリヤ」は「マリア」となります。ローマ皇帝「アウグスト」は「アウグストゥス」、「テベリオ」は「ティベリウス」、「カイザル」は「カエサル」です。

地名では、「アジャ」は「アジア」、「アレキサンドリヤ」は「アレクサンドリア」、「クレテ」は「クレタ」、

何を、どのように変えたのか

「アンテオケ」は「アンティオキア」、「サマリヤ」は「サマリア」といった具合です。

原語における表記にできるだけ即した、小さな変更を加えたものもあります。「カイサリア」、「フリユギアとパンフィリア」などが、そのような例です。

その一方、長年なじんできた固有名詞は、他の邦訳で変更していても、変えません。ペトロでなくペテロ、エリサベトでなくエリサベツ、ファリサイでなくパリサイ、エフエソでなくエベソ、フィリピでなくピリピとしました。

新改訳聖書としての連続性

以上見てきたことから、「かなり変わる」と思われたかもしれませんが。確かに変わります。九〇パーセント以上の節に何らかの変更が加えられました。しかし、それには句読点の変更のようなものも含まれますから、「案外変わっていない」という印象を受けるかもしれません。実際、サンプル版を読まれた方の中に、「ほとんど変わっていないと思うたが、第三版と比べて読んで、ずいぶん変わっているのに驚いた」とコメントされた方がおられました。それは、私たちにとっては「うれしい」評価です。新改訳としての連続性を大事にし、しかも、分かり易く読み易く、正しく適切な訳文をお示しできるように、努めてきたからです。この「連続性」ということでは、特に二つのことを申し上げたいと思います。

(1) 新改訳らしさを保つ

神に関する表現は、これまでどおりひらがな表記にしました。神や主イエスが自らに言及なさるとき

何を、どのように変えたのか

は「わたし」、私たち人間の場合は「私」です。

また、「みこころ」「ことば」「からだ」「さばき」「わざわい」「いのち」といった言葉も、引き続きひらがなで表しています。漢字では被造世界の現実でイメージが固定化してしまうからです。

また、できるだけ漢語ではなく和語という、初版以来の原則も保っています。

(2) 慣れ親しんでいる聖句は最小限の変更

多くの方が暗唱している聖句は、どうしても変えなければならぬ理由がない限り、変更は最小限にしました。

(内田和彦 Ⅱ 翻訳編集委員・新約主任)

原文に忠実で自然な日本語

新改訳聖書の改訂において、日本語に関わる事項について、どのような方針が採られたのか、述べたいと思います。

(1) 文体について

今回の改訂における文体に関する考え方は、二本の柱からなります。

まずは、デスマス体を重視する考え方です。新改訳第三版の文体は、第一版の新約聖書の国語顧問だった三尾砂氏の判断を踏まえて、イエスの発話やパウロの手紙の基本的な文体をデスマス体にしました。これは今回の改訂でも保持されています。ただし、従来の訳で過度に丁寧になっている箇所については

何を、どのように変えたのか

改める作業を行っています。

もう一つは、ジャンルに合った文体を採用するという方針です。従来の新改訳では、詩文と散文が文体的に区別されていませんでした。散文でも、法律、歴史などの内容に応じての文体選択が行われていませんでした。今回の改訂では、詩篇の文章を詩文的な文体にしたり、散文でも内容によって若干の違いを設けて、ジャンルに合わせた改訂を行っています。

(2) 漢字について

従来の新改訳は、第一版を製作した当時の当用漢字の方針に従った部分があり、また漢字を限定的に採用した口語訳の判断を受け継いだために、ひらがなが多い文章になっています。今回の改訂では、常用漢字を広く採用したほか、漢字でないと意味が取りにくい場合や、ひらがなだと見苦しい場合にも漢字を用いています。新たに採用した漢字は多数ありますが、数例を挙げると「献げる」「支える」「幸せ」「闇」「大勢」、さらに「飢饉」などです。その一方で、「いのち」「みこころ」「さばき」「あかしの箱」など、聖書で使われる意味が一般の意味と異なる場合や、新改訳の雰囲気を作り出しているような語の場合は、ひらがなを用いています。

(3) 敬語

従来の訳においては、二重に敬語が使われているケースがあり、そのような場合は改められています。また、人間同士の上下関係による敬語を限定的に用いる傾向がありました。それについても日本語で不自然な場合は改訂を行いました。

(4) 語彙・表現

何を、どのように変えたのか

語彙については、新しい訳語の採用や統一などが行われていますが、日本語の観点からは、日本語の変化に対応して訳語を変える作業も行いました。「苦しむ」の意味の「なやむ」や、「満足する」の意味の「飽きる」などがそうです。このような例はかなりの数に上ります。また、ヘブル語、ギリシア語のイディオムのな表現に関しては、日本語で意味が推測できると思われる場合には、そのまま訳す方針が採られています。

(5) 文脈の流れ

今回の改訂において重要な点の一つは、文脈の流れを重視したことです。従来の新改訳では、それぞれの節は正しい訳になっていても、節と節の間の関係が分かりにくいケースがありました。一般に、節ごとに文法的な修飾関係のみに基づいて訳出すると、節間のつながりが分からなくなる場合が多くあります。今回の改訂では、複数節にまたがる情報の流れに注目し、原文における情報の提示順序を意識しながら、訳文の検討を行いました。

最後に、「日本語としての自然さ」に関する、基本的な考え方について触れておきます。新改訳が目指しているトランスバレント訳は、日本語と文章の読みやすさを犠牲にすると考えられがちです。確かにそのような側面もないわけではありません。しかし、トランスバレントであるがゆえに、原文の意味が日本語文にも鮮明に浮き上がるようにすることが可能であると考えています。原文に忠実であり、かつ日本語として自然な文章が可能である、という立場に立って、日本語の面からの検討をしました。

(松本 曜 II 翻訳編集委員・日本語主任)

●訳文の変更について詳しくは『聖書翻訳を語る「新改訳2017」何をどう変えたのか』をご参照ください。